

長谷寺銅板法華説相図の莊嚴意匠について（下）

長谷川 誠

目次

（上）

はじめに

一、莊嚴意匠の特徴

（一）宝塔（二）千仏（三）仁王（四）奏樂天人（五）意匠の構成

（以上、本誌第八号所収）

（下）

二、銘記にみる造立意図

（一）銘記の構成

（二）造立意図

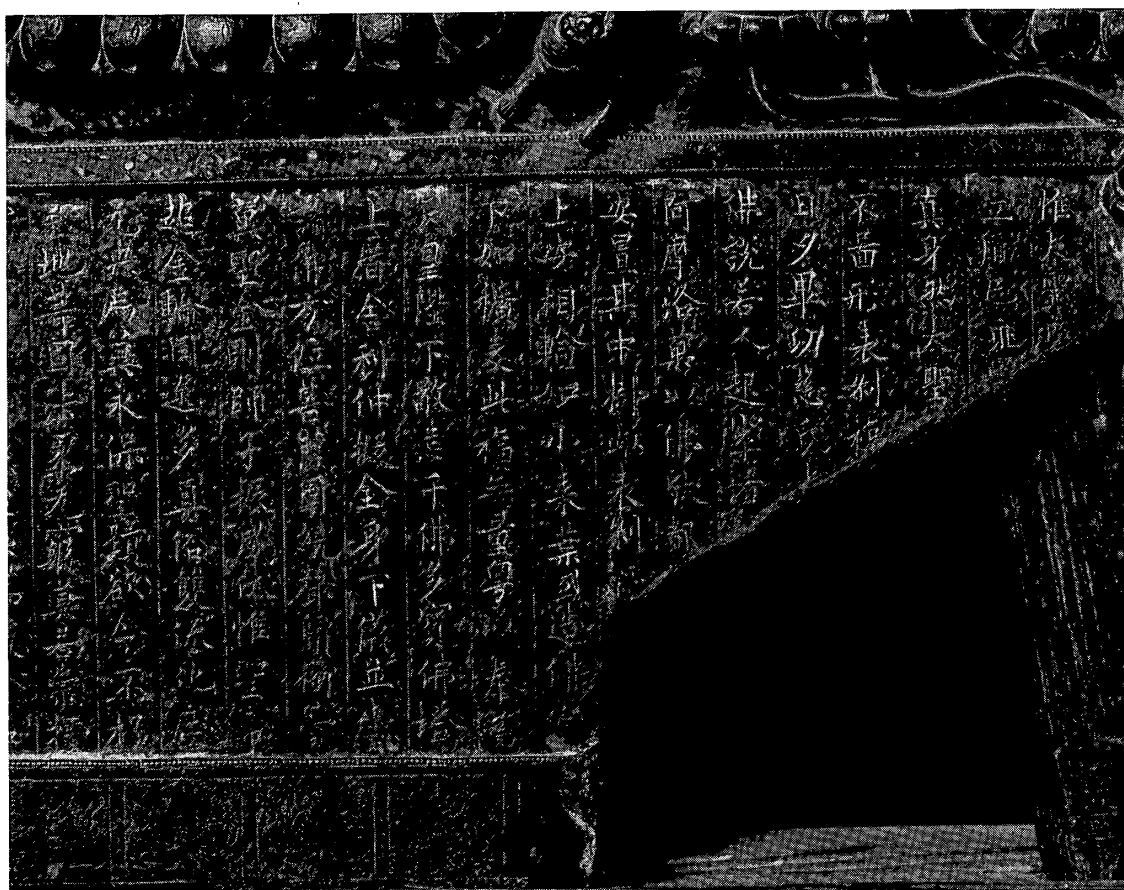
（三）造立時期

結び

二、銘記にみる造立意図

本法華説相図の銘記は、最下段の方面内に豎野入り1行12字詰27行

で陰刻されるもので、かつてその左右に一对の仁王を配してゐたが、現在は銘記の冒頭の一部分が左側の仁王とともに欠損してゐる。しかしその範囲で知られる内容のうち、造立時期などの歴史的事実は、要するに本法華説相図を「戊年の七月上旬に、道明が80人ばかりの人を率ゐて、飛鳥浄御原大宮治天下天皇のために敬造した」といふものである。ただしその「戊年」をいつに充てるか、また「道明」とはいかなる人物か、さらに「飛鳥浄御原大宮治天下天皇」とは誰を指すのかなど、すでにこれまでににおいても多くの議論がある。いづれにしろこれらの課題は法華説相図の制作時期をいつにするかの問題に帰着するが、制作時期は天武一五（六八六）年、文武二（六九八）年、和銅三（七一〇）年、養老六（七二二）年、宝亀元（七七〇）年の各説にわたつてゐる。ここでは戊年をいつに充てるかを検討するに先立ち、拙論（上）でみた本図の莊嚴意匠の特徴との関連に重点をおいて、まづ銘記の構成を検討し、継いで造立意図とその時期について確かめることにしたい。



1. 長谷寺銅板法華說相図（銘記・部分）

（一）銘記の構成

銘記は、前半の銘序と後半の銘辞に大別される。うち銘序は主として四六駢儷体によつて記述され、また銘辞部分は銘序を承けて四言二句の律語体で構成される。

まづ銘序部分①～④は大きく4分され、①欠字の多い書出し部分（その大意さへ把握できない）、②『甚希有經』をひき起塔の功德を説く部分、③次いで天皇のために千仏多宝仏塔を敬造する願意と、本図の構成要素が述べられ、さらに④弥勒仏に擬せられる聖帝の聖蹟は永久に金石に明記されると謳ひあげてゐる。これはあたかも絶句における起承転結の運びをみるやうな整齊とした展開である。

一方、銘辞⑤は銘序を承けて、四言二句の聯句4聯（a・b・c・d）の韻文で構成し、これに併せて同じく（e）四言二句の聯句と、末尾（f）の散文文によつて、造立年月と願主、さらに飛鳥浄御原天皇の奉為に敬造したことを述べてゐる。歴史的事実はこの部分でしか述べてゐない。

銘記はすでに指摘されてゐるやうに、その撰文に際しては『甚希有經』（1）をはじめ、『広弘明集』の瑞石像銘や光宅寺刹下銘の用語を引用してゐることが明らかである（2）。駢儷体の文体はそもそも4字ないし6字の対句をならべ、古典的な雅語や成句などを多く撰んで、修辭的な文飾を文字通り「撰文」することにあるのだから、なほ今後においても上記以外の成句の先例が見いだせる可能性はあるだらう。（ここでは「」内に『甚希有經』により補へる字句を、また「瑞石像銘」の用語は傍標△印で、「光宅寺刹下銘」のそれは▲印で各々示した。）



また、ここでは銘記の内容と文体の構成を明示するため、あへて駢体文の趣旨にそつて4ないし6字ごとに句点をほどこし適宜に改行した。いふまでもなく駢体文の銘記は、銘序で述べた趣旨をさらに銘辞において韻文により承けてrefrainするのが常套である。しかしここでは両者がそれほど厳密には対応せず、また銘辞における押韻や平仄もさほど厳密なものではない(3)。だが、銘記は初めが欠けてはゐるものの全体的には駢儷体によりみごとに整へられてゐる。そのためある種莊重で格調が高く、また華麗さもあるが、反面、修辭的形式的なきらひも否めず、そのぶん真実味に欠けた駢体文の欠点も窺へよう。

〔原文〕

① 惟夫靈應^{△△△}
立稱已乖^{△△△}

眞身然大聖^{△△△}
不圖形表刹福^{△△△}

日夕畢功慈氏^{△△△}
佛說若人。起卒堵^{△△△}婆。其量下如。〔

② 阿摩洛菓。以佛馱都。〔如芥子許。〕
安置其中。樹以表刹。〔量如大針。〕

上安相輪。如小棗葉。或造佛像。
下如穠麥。此福無量。

③ 粵以奉爲。天皇陛下。敬造千佛。
多寶佛塔。上厝舍利。仲擬全身。

下儀並坐。諸佛方位。菩薩圍繞。

聲聞獨覺翼聖。金剛師子振威。

④ 伏惟聖帝。超金輪同逸多。

眞俗雙流。化度无央。

庶冀永保聖蹟。欲令不朽。

天地等固。法界无窮。

莫若崇據靈峯。星漢洞照。

恒秘瑞巖。金石相堅。

⑤ 敬銘其辭曰。

a 遙哉上覺。至矣大仙。(下平先韻)

理歸絕妙。事通感緣。(下平先韻)

b 釋天真像。降茲豐山。

驚峯寶塔。涌此心泉。(下平先韻)

c 負錫來遊。調琴練行。

披林晏坐。寧枕熟定。(去声徑韻)

d 乘斯勝善。同歸實相。

壹投賢劫。俱值千聖。(去声敬韻)

e 歲次降婁。漆菟上旬。(上平真韻)

道明率引。捌拾許人。(上平真韻)

f 奉為。飛鳥清御原大宮治天下天皇。

敬造。

〔釈文〕

① (惟るに、夫れ靈心)□

稱を立つるは、已に□□に乖く。□

眞身なり。然して大聖。

不図形表刹福。

日夕功を畢る。慈氏。

②

仏、説きたまはく。若し人、卒堵婆の其の量下りては、阿摩洛菓の如きを起て、仏の駄都の芥子許りの如きを以てし、

其中に安置し、樹つるに表刹の量、大針の如きを以てし、

上に相輪の小さき葉の如きを安き、或いは仏像の

下りて横麦の如きを造らば、此福無量なりと。

③

粵を以て、天皇陛下の奉為に、敬みて千仏多宝仏塔を造る。上に舍利を厝き、中は全身に擬へ、

下は並坐に儀る。諸仏は方位び、菩薩は圍繞し、

声聞・獨覺は聖を翼け、金剛・師子は威を振ふ。

④

伏して惟るに、聖帝は金輪を超え逸多に同じ。眞俗双び流き、化度央くることなし。

庶冀はくは永く聖蹟を保ちて朽ちせず、

天地と等に固く、法界と窮まり無からしめんと欲す。

若かず崇く靈峯に拠りて、星漢洞らかに照らし、

恒に瑞巖に秘して、金石と相堅からんには。

敬みて其の辞を銘して曰く。

a ⑤

遙かなる哉上覺、至れる矣大仙。理、絶妙に帰し、事、感縁に通ず。

b

釋天の眞像、茲豊山に降り、

驚峯の宝塔、此の心泉に涌く。

c 錫を負ひて来遊し、琴を調べて練行す。

林を披いて晏坐し、枕に寧じて熟定す。

d 斯の勝善に乗じて、同に実相に帰せん。

ひとしく賢劫に投じて、俱に千聖に値はん。

e 歳、降婁(戊)に次る漆菟(七月)上旬、

道明、捌拾(八十)許りの人を率引るて、

f 飛鳥清御原大宮に天の下治めす天皇の奉為に
敬みて造る。

さて、①「惟夫靈応…」以下、「慈氏…」までが下半が大きく欠けてゐるので不明だが、要するに書出し部分である。うちに「…昼夜にわたつて功を畢り、慈氏…」とあるから、すでになにかの功を畢へて、弥勒仏についてなにがしかを述べようとしたものかも知れない(4)。

②はすでに前稿(上)においても述べたやうに、『甚希有経』の一節を引いた部分で、起塔造像はたとひそれが微細なものであつたとしても功德が無量であることを説く。通釈すれば次のやうにならう。

「仏は、つぎのやうに説いてをられる。もし人が、塔婆の極く小さいもの、あたかも余甘子の実のやうなものを起てて、仏の舍利の芥子粒ほどのものをその中に安置し、また刹柱の大きさもせいぜい大針のやうなものを樹てて、上層の相輪部分には小さな葉の葉のやうなものを置き、あるいは仏像もこれまた大麦の粒ほどのものを造つたとしても、その功德は無量である、と。」

③は本法華説相図が天皇陛下の奉為に造られたこと、またその図様の概略が述べてある。ここの通釈もすでに前稿において述べたが、繰返すと次のやうになる。

「これを以て、天皇陛下の奉為に、つつしんで千仏ならびに多宝仏塔をお造りした。塔の上層には舍利を安置し、中層には全身舍利(多宝仏)を置き、また下層には釈迦・多宝仏の並坐像を儀つた。周囲には諸仏や菩薩がとり囲み、声聞や独覺は聖(仏)を翼けさらに金剛力士や師子は側で威を振つてゐる。」

④は銘記の述作目的ともいふべきところで、「聖帝は金輪を超え逸多に同じ」として金輪聖王と弥勒の故事を踏まへながら、聖帝(天皇陛下)の徳は金輪王(転輪聖王)をも超えて逸多(阿逸多||弥勒)に等しく、救ひ導くこと真俗(道俗)ともに欠けるところがないと謳ひあげる。「庶冀」以下は、聖帝(天皇)の洪業を永遠に記録すべきことを述べたもののだが、要するに金石に明記することをいふための先例成句を多用した修辭的表現になる。

「畏れ多くも思ひ及ばせば、聖帝(天皇陛下)は金輪王(転輪聖王)を超えるばかりか弥勒仏(阿逸多)と同じであり、在家、出家の区別なくともに仏法を流布され、衆生を導き給ふことは尽きることがない。そこで心から冀ふことは、永久に陛下の聖蹟を保持して朽ちさせず、天地とともに堅固に、また宇宙の窮まりまでも尽きることのないようにすることである。そこで此処、けだかくも神聖なこの山(豊山)をよりどころにし、銀河も冴えて煌めくこの地の立派な巖山に秘蔵するのだ(5)、それは金石が堅固でこれに及ぶものがないからである。」

ここまでが銘序部分である。その構成は、①の書出しで、表刹（宝塔）ないしは慈氏（弥勒）のなにがしかにふれて説き起し、②では経説をひいて起塔造仏の功德を述べて承け、③では転じて現に天皇陛下のために本法華説相図を敬造したこととその像容を記述し、さらに④では弥勒に擬へられる聖帝（陛下）の道俗ともに教導されることの偉大さを称へつつ、金石に明記して洪業の不朽であることを冀つて結んでゐる。

⑤は、以上の銘序部分を承けて韻文によつて refrain した銘辞部分である。ここは当然 4 文字づつ 2 句を連ねて、つごう 5 聯の聯句で構成される。銘辞の 5 聯の聯句は a i e で示したが、a i d がいはゆる律詩体の起聯・頷聯・頸聯・尾聯に相当する。ただし e の聯句も末尾を起聯に併せて平韻で押韻し語調を整へてゐる。しかしここは文意の上では次の f の散文体に続き、「敬造」の時期、願主、願意の歴史的事実を連続させて記してゐる（この e と f については 42 頁で後述）。

銘辞は銘序を受けて仏と仏法の偉大さを称へるとともに、法華説相図を祀り、これを機に同朋が相寄り修練を共にし、現在賢劫の千仏に値ふことを勧めて、道明ら 80 人ばかりが「飛鳥清御原大宮治天下天皇」の奉為に本法華説相図を造立したことを明記して結んでゐる。これを通釈すれば以下のやうにならう。

「敬んで以上のことを辞（韻文）にして銘ずる。さとり境地はなんと遙かなことであらう。仏は、よくぞ修行を達成されたものだ。その仏が説かれた真理は絶対的であるといふべきで、またあらゆる現象は因果によつて生じ、つねに相対的であるといふ。この銅板法華説相図

（千仏多宝塔）の造立は、釈尊の真容が豊山の地に降臨したことであり、また『法華経』見宝塔品が説く靈鷲山下の多宝塔が、われわれのころの泉においても涌出したことだ。さあ、錫杖を負うてここに来集し、琴を調べて練行し、林をひらいて静かに坐り、枕をやすらかにして禅定の境地を待ち、この絶好の機会に乗じて、ともに真理の途に向かひ、ひとしく現在賢劫の諸仏のもとに赴いて、もろともに千仏に値はうではないか。年は戌年の七月の上旬、僧道明が 80 人ばかりの人を率ゐて、飛鳥清御原宮に治天下の天皇のために（この法華説相図を）敬造した。」

（二）造立意図

以上、この銘記により窺へる僧道明の法華説相図の造立意図とはいつたい何であつたのか。その第一は、銘序においてみるやうに、そもそも宝塔造立の功德にもとづいて天皇のために本法華説相図を造立したが、それはあたかも転輪聖王に擬せられる天皇が金輪王を超越してゐるばかりか、当来仏の弥勒仏にも等しい存在であり、その天皇の洪業を不滅の金石に明記して永遠に伝へようとするものである。第二には、銘辞においてみるやうに、『法華経』見宝塔品が説く、釈迦・多宝仏の分身（賢劫千仏）が来集し宝塔を讃歎恭敬したことにちなみ、これを体した道明ら同朋が、天皇の奉為に法華説相図を敬造し、あやかつてここ豊山の霊地で修行し賢劫千仏に値はうとすること、つまり同朋らがともに千聖のひとりとなることを勧めることにある。

この弥勒に擬せられる天皇の洪業の明記と、僧道明らが千聖に値遇することの願意の真意には、弥勒仏も千聖も、ともに『法華経』見宝

塔品が説く来集の釈迦・多宝仏の分身(賢劫千仏)であることが前提としてある。前稿(上)で述べたやうに、本法華説相図において中央に宝塔が据ゑられ、その四周に銅板押出(鍍鏤)の賢劫千仏が配置され、うち上段の千仏中の方面内には弥勒倚像が置かれてゐる所以である(6)。

(三) 造立時期

造立時期については、銘記の「降婁年漆菟上旬」(戊年七月上旬)をいつに充てるか、すなはち天武一五(六八六)年をはじめ、文武二(六九八)年、和銅三(七一〇)年、養老六(七二二)、宝亀元(七七〇)年(7)のいずれの戊年かで古くから諸説がありいまだ定説をみない。

なかでも文武二年の福山説は、銘記の「聖帝超金輪同逸多」を、唐の則天武后の尊号「慈氏越古金輪聖神皇帝」を意識的に模倣して書かれたものとみて、制作時期をその尊号の時期、すなはち唐証聖元(六九五)年(わが持統九年)を溯り得ず、尊号以降の戊年、つまりわが文武二(六九八)年に充てたものである(8)。この説は、造立時期を戊年としか記さない銘記にあつて、文中のほかに貴重な手掛かりをもとめたものとして、かなりの説得力をもつて受入れられてゐる。

しかし果してさうであらうか。単に彼我の表記の類似だけで、たやすく制作時期を特定してよいものか。それにだいいち福山説はこれのみを根拠にして、当初に提唱した宝亀元年説から文武二年説へと一挙に70年余も溯るのだからさう容易ではない。

a. 「聖帝超金輪同逸多」

問題の「聖帝超金輪同逸多」だが、「聖帝」とは経説でいふ転輪聖

王を指し(9)、またここではそれを「天皇陛下」、つまり「飛鳥清御原大宮治天下天皇」を示してゐるのはいふまでもない。したがつてこは文字通り「聖帝」(転輪聖王である天皇)は金輪王を超越した存在で、弥勒(阿逸多)と同じ」とするもので、天皇をいはゆる経説でいふ俗界の理想的な君主である転輪聖王に充て、さらにその転輪聖王のうち、金輪を転じて善政を布く金輪聖王をも超えるばかりか、釈迦の後仏としての弥勒仏に擬へてゐるのである。

一方、則天武后の「慈氏越古金輪聖神皇帝」はたしかに証聖元(六九五)年一月に加へられた尊号である。これを直訳すれば「古への金輪王を越えた存在、慈氏(弥勒)である聖神皇帝」の意味であるから、ここでも俗界の帝王を弥勒仏に充ててゐる点ではたしかに共通してゐる。しかしそれだからといって本法華説相図の表記が則天武后の尊号を模倣したもの、あるいは武后の尊号を倣たねばならないとするのはどうであらうか。

いま則天武后の尊号「慈氏越古金輪聖神皇帝」にいたる経過を少していねいにみれば、次のやうになる(『旧・新唐書』・『通鑑』)(10)。

- ① 垂拱四(六八八)年五月 聖母神皇 (偽造瑞石「聖母臨人永昌帝業」)
- ② 天授元(六九〇)年九月 聖神皇帝 (偽撰『大雲經』太后乃弥勒仏下生…)
- ③ 長寿二(六九三)年九月 金輪聖神皇帝 (承嗣等表請加尊号曰金輪…作金輪等七宝)
- ④ 延載元(六九四)年五月 越古金輪聖神皇帝 (承嗣等上尊号曰越古金輪…)
- ⑤ 証聖元(六九五)年一月 慈氏越古金輪聖神皇帝 (太后加号慈氏越古金輪…)
- ⑥ 証聖元(六九五)年二月 金輪聖神皇帝 (太后去「慈氏越古」之号)
- ⑦ 天冊元(六九五)年九月 天冊金輪聖神皇帝 (加号天冊金輪…)

このめまぐるしく変る尊号のうち、「慈氏越古金輪聖神皇帝」は証聖元年一月からわづか一カ月、その二月にはこれを廃して九月には新たに「天冊金輪聖神皇帝」と改称、元号も天冊萬歳に改められた。この改元には、重用した怪僧薛懷義のてがけた大厦の明堂が、彼みづからの放火によつて一夜にして灰燼に帰した事件がきっかけとなつたが、この明堂の罹災は、天授元(六九〇)年以來の「太后は弥勒仏の下生なり、まさに唐に代りて帝位に即くべし」(讖文)とした、いはば武周革命の終焉を象徴するものであつた。つまり「慈氏越古金輪聖神皇帝」とは、その武后が策謀した武周革命を象徴する尊号であり、武后を金輪聖神皇帝にみたて、つひには弥勒の下生に擬するといふ、いはゆる「道(教)先仏(教)後」の唐朝を廢して「仏先道後」の武周の王朝を立てた武后の仏教尊崇政策によつて生まれたものである(11)。

しかしここでいふ将来、弥勒仏が下生しこの世を救ふ思想とは、必ずしも武后の時代に特有の考へ方ではない。ひろく釈迦滅後の仏教徒が未来に期待した理想郷の考へ方のひとつであり、中国では将来仏である弥勒仏の下生は阿弥陀浄土信仰に先がけて北魏時代以來の仏教徒の憧れの的でもあつた。ことに体制に逆らふものが、みづからを弥勒の下生だと称して民心を収攬し反乱に及んだ例はしばしばあつた(12)。これは要するに、釈迦仏の後継者である弥勒仏が、転輪聖王すなはち理想的な君主の出るときに出現するとされたからである。古くから中国の仏教では、転輪聖王がいつかこの世界に出て国を統一し、そのため国民に平和と安樂を与へる時代がくることへの願望があつた。一方、釈迦仏が去つたのちにこの世界には仏がなくなつたので、将来また

仏が出てすべての人々を救済する時がくる(弥勒仏出現)といふ期待もあつた。かくして将来仏である弥勒仏の到来と、仏教的な理想的君主(転輪聖王)の出現とは重ねて念願されるやうになり、つまりは一つの信仰にまとまる傾向にあつた。

武后の「慈氏越古金輪聖神皇帝」の尊号も、この当来弥勒仏出世の伝統的な信仰の頭れにほかならず、これは妖僧薛懷義らの策動により『大雲經』に付会した讖文によつて正当化したものであつた(13)。

したがつてこの尊号が直接的に本法華説相図の銘記に反映したと考へるよりも、べつになにがしかの典拠があつたか、あるいは少くとも後述のやうなすでに流布した経説により、「転輪王」弥勒(阿逸多)の考へが反映したものとするのが自然ではなからうか。つまり銘記と尊号とは同根異株の關係にあつた可能性である。とすれば、制作時期を尊号の時期を前提に推定する必要はないのではないか。

b. 転輪王と弥勒(阿逸多)

そもそも銘記でいふ「聖帝」とは元來の「転輪聖帝(王)」の略である。この転輪王が金輪王を超えた存在、阿逸多(弥勒)と同じだとする考へは、仏伝の「阿私陀仙相太子」の「在家にあつては、年二十九にして転輪聖王、出家しては一切種智を成じて天人を済ふ(成仏)」の故事でよく知られてゐる(14)。その結果、俗界の転輪聖王とは実は仏のことで、転輪王は俗界にあつては即位とともに輪宝をもつて国を領し、その輪宝の種類によつてそれぞれ金・銀・銅・鉄輪王になるのだといふ。やがてこれは後仏の弥勒仏(阿逸多)にも敷衍され、例へば『中阿含經』では弥勒および阿逸多がそれぞれ「螺」なる転輪王になること

が説かれてをり、ここでは弥勒と阿逸多とは別人として扱はれてゐる。しかし『仏説觀弥勒菩薩上生兜率天經』あたりからすでに阿逸多は弥勒の名となり、ここでは同一人とされるほか(15)、『法華經』從地涌出品では、釈迦牟尼仏から後仏として授記をうけ、ここでも同一人として扱はれてゐる(16)。かうした仏||轉輪王||弥勒仏の信仰は、やがて中国では北魏時代以降、俗界の帝王を弥勒の生れ変りとみる、いはゆる帝王||弥勒神話をうながし、弥勒仏下生をそのまま理想的な帝王の出現に擬へるやうになつた。

ここで上記の「仏||轉輪王||弥勒仏」の信仰が窺へる經典と、同じく前稿(上)で扱つた「賢劫千仏と弥勒仏」、「賢劫千仏と仁王」を説く經典のわが国への将来時期を検討すれば、いづれも隋仁寿二(六〇二)年の『衆經目錄』(『大正藏經』五五卷)には所収されてをり、これにもとづく一切經がすでに孝徳天皇白雉二(六五二)年には将来されてゐたことが推測できる(34)。いま、これを列記すると以下のやうになる。

〔經典名〕	〔卷數〕	〔訳者〕	〔衆經目錄頁〕
過去現在因果經	四卷	宋 求那跋羅	一七〇a
中阿含經	六〇卷	晋 僧迦提婆	一五四a
觀弥勒菩薩上生兜率天經	一卷	北凉 沮渠安陽侯	一五二b
妙法蓮華經	八卷	姚秦 鳩摩羅什	一五六b
弥勒大成仏經	一卷	姚秦 鳩摩羅什	一五六c
密迹金剛力士經	六卷	西晋 三蔵竺法護	一五一a

かうした經典類のいちいちの将来時期と将来者はもちろん具体的に

は特定できず、また仏||轉輪王||弥勒仏の信仰や、賢劫千仏思想が実際ににおいていつから始つたかを確かめることは難しい(17)。しかし道昭の帰国(六六二)に続く重なる初唐文化の受容と新訳經典の将来を考慮すれば、ことに天武朝から持統朝にかけての博仏・押出仏(弥勒倚像の流行)による堂塔莊嚴の實際をみれば、七世紀後半における千仏思想の盛行は想像以上のものがあつたとみられる(18)。

したがつて「聖帝(轉輪聖帝)」に具体的な「天皇陛下」や「飛鳥清御原大宮治天下天皇」を仮託する発想conceptは、少なくとも『法華經』等が説く「轉輪王||弥勒(阿逸多)」の考へ方によつて十分に促され得るものであつたらうし、当時すでにわが国においても十分に定着してゐたものと推測できるから、あへて則天武后の尊号を俟つまでもなからう(彼の国の尊号はわづか一カ月に過ぎない)。したがつて後述のやうに天武天皇に擬へる以外に、ことに天武末年の天皇の重篤といふ通れ難い危急存亡の時機を描いては、ほかに充当し得る該当者は考へにくいのではなからうか。

ここで問題にしたいのは、前稿(上)で述べた本法華説相図じたいの図像上の性格や構成要素である。宝塔は画面の中心に据ゑられ、その高さは画面の縦の長さの3分の2を占め、総じて大きく目立つように配置されてゐるばかりか、その両脇の仏像群にしても、宝塔の下層を挟んで左右に大きく賑やかに表現されてゐるので、本図の主題がほとんど中央の宝塔涌出の場景にあるやうに受けとられがちである。したがつてこれまでも本法華説相図については、『法華經』見宝塔品の宝塔涌出に焦点をおいて論じられる傾向にあつた(19)。しかし本図の構

成には、例へば賢劫千仏↓弥勒仏の関係をはじめ、賢劫千仏↓宝塔脇
仏像群へ、さらに賢劫千仏↓仁王にみるやうに、そのいづれにおいて
もよるべき所依經典が確かめられるとともに(20)、さらにこれらを主
題の宝塔涌出に關係させてたどれば、賢劫千仏↓弥勒仏(↓宝塔脇仏
像群・↓仁王)↓宝塔二仏(釈迦・多宝)とつながる相互密接な關係が
窺へよう。つまり本法華説相図は、主題が単に『法華經』見宝塔品の
宝塔涌出の描写にあるだけではなく、いはばその全体にわたり賢劫千
仏思想の基調のもとで構成されてゐるのである。

すでに前稿(上)でも述べたやうに、本図は中央の宝塔涌出の場景と
ともに、周辺に集ひ来る押出仏による賢劫千仏の様相が表されてゐる
が(銘記はためにあへて「千仏多宝仏塔」と呼ぶ)、うち上段左右の千
仏中方画内三尊仏は、賢劫千仏の一斑としての「弥勒仏」として位置
づけられるものである。これは雲岡石窟第一四窟前室西壁像の場合と
同巧で、そこでは中段の尖拱龕内の釈迦・多宝二仏並坐像とともに、
その上段に同じく尖拱龕入りの「弥勒仏」が置かれ、その左右に一對
の弥勒菩薩交脚像が表現されてゐることと対応する(21)。このやうに
『法華經』見宝塔品にもとづく賢劫千仏(釈迦・多宝の分身)の集會の場
景において、その一斑として特に弥勒仏が扱はれることは、当然、釈迦
を継ぐ当来仏として弥勒にすでに格別な期待が寄せられてゐたからで
ある。

この弥勒仏が現実の理想的な帝王に擬せられた、いはゆる「弘仏教
の天子即ち^{たうぎん}当今の如来」の思想の例としては、現に雲岡曇曜五窟が北
魏王室の5代の皇帝に擬して開鑿されてゐることが挙げられるが、こ

とにその第一九窟の本尊を弥勒仏坐像とみて、これを北魏建国者の太
祖道武帝に擬せられるならば(22)、同窟の内部が無数の千仏によつて
満たされてゐるのも、ここでいふ賢劫千仏と弥勒仏との密接な關係に
対応するものとして首肯できるであらう。

したがつて銘記にいふ「(転輪)聖帝は金輪(王)を超へ、阿逸多(弥
勒)に同じ」も、釈迦仏から弥勒仏、弥勒仏から転輪聖王へと展開す
るいはゆる弥勒=転輪聖王信仰、ないしは「当今如来思想」の流れか
らすれば、べつに則天武后の尊号に俟つまでもなく、すでにわが国に
おいても十分に導き出せるものではなかつたか。その意味では、弥勒
仏に擬せられる当今聖帝(天皇)はまた、「壺しく賢劫に投じて、俱に
千聖に値はん」とする道明たちの教主であるとともに、「真俗双び流
き、化度央くることない」聖主でもある。つまりここでの弥勒仏は賢
劫千仏の一斑として、本図上段の賢劫千仏の只中に方画内三尊倚像と
して浮かぶがごとく置かれてゐる所以でもある。

c. 「戊年」はいつか

ここで、冒頭にも述べた銘記の「歳次降婁。漆莧上旬。」(戊年の
七月上旬)の「戊年」をいつに充てるか、あるいは「飛鳥浄御原大宮
治天下天皇」とは誰を指すかが問題となる。

すでに前節の通り、銘記の「聖帝超金輪同逸多」が則天武后の「慈
氏越古金輪聖神皇帝」を前提にする必要がないとすれば、「飛鳥浄御
原大宮治天下天皇」はその和風諡号からしても天武天皇を指し、その
戊年とは同天皇の朱鳥元(六八六)年七月である可能性が高い。ただ
し『書紀』は「朱鳥」の改元は同年七月二〇日のこととし、また「飛

鳥淨御原宮」の宮号もそれにとまふとあるから(23)、銘記の「降婁(戌年)」を朱鳥元(六八六)年に同定するとしても、和風諡号によつては、銘記の撰文は天皇の歿後、すなはちその九月九日以降でなければならぬだらう。しかし銘記にはべつに「粵以奉為。天皇陛下。敬造千仏。多宝仏塔。」とあるので、ここの「天皇陛下」は当今の天皇、つまり今上陛下の謂とみなされ(24)、発願はすでに天皇の存命中のこととみるのが至当であらう(25)。

以上、福山説のやうに則天武后の尊号を前提にさへしなければ、銘記は極めて無理なく天武天皇の治世の発願で、その撰文は崩御後に充てて理解できるのである。それに『書紀』の朱鳥元年、つまり天武五年といふ年は、天皇の病氣平癒に関する記事で埋め尽くされ、つひにはその九月九日の崩御を迎へ、その月の殯宮の記事で終つてゐる。

ここで煩をいとはずその大要を追へば、この年二月の大安殿出御を最後に天皇の公務の姿は見えず、四月には侍医を昇叙・賜姓するほか、多紀皇女らを伊勢神宮に遣はしてゐるので、この時期に発病のことがあつたらしい。五月二四日にははじめて病篤くなつたと『書紀』は記す。ために川原寺に薬師經を説かせるほか、諸寺の堂塔を掃き清めて大赦を行ひ、六月に入つては陰陽師・侍医ら34人に加爵し、病氣を占ふに草薙劍の祟りとするので、ただちに熱田社に使を遣はし、一六日には飛鳥寺の衆僧に勅して三宝に病氣平癒を祈願させ、また川原寺に百官を遣はして燃灯供養と悔過の大法要を行はせてゐる。悔過は翌七月に入ると高僧をあつめて宮中でも行ひ、また続いて金光明經を読ませる。前後して、諸国の大解除、調・徭の減免、大赦、広瀬・龍

田社の祭祀等が続き、一五日には勅して政治を皇后と皇太子に委ねたが、これは病がいよいよ篤くなつたことを示すものであらう。先述の「朱鳥」の改元はこの月二〇日に行はれたのである。また同月には王臣が觀世音像(續仏)を造り大官大寺で觀世音經を説かせてゐる(26)。次いで八月になるや百僧を出家させるとともに、宮中にても百菩薩を安置して觀世音經を読ませ、さらに神祇とともに土左大神に祈願奉幣し、皇太子はじめ諸皇子に封戸を加へたほか、檜隈寺・輕寺・大窪寺・巨勢寺にも封戸を賜つた。やがて九月一日、親王はじめ諸臣を川原寺に集めて祈願したが、つひに癒えることはなかつた(27)。

以上のやうに、天皇の病氣は五月二四日にはじめて篤くなり、川原寺をはじめ飛鳥寺など諸寺における祈願が続いたが、銘記の「漆莧上旬」(七月上旬)とは、このやうな天皇の病悩の真只中であつた。天武一五年造立を提唱する小野・山田説は、この天皇の病氣平癒と寿福を祈願して造立されたものとする(28)。妥当な見解と言へるのではあるまいか。

ただし両説はともに、『三代実録』の律師長朗の牒状にさらに「大和国長谷寺是長朗先祖川原寺修行法師位道明」(29)とあることと、また『書紀』の同年七月前後の川原寺における誦經や燃灯供養などがあることを斟酌して、「道明」を長朗の牒状や縁起にいふ川原寺の僧と推定してゐるが、これにはかに首肯しがたいものがある(30)。すなはちこの長朗の申牒には、明らかに逆に本銘記や『書紀』に依拠したところがあり、ただちに信頼しがたいからである(31)。したがつて長朗の申牒による限り、道明を川原寺僧と推定するのは控へねばならな

いだらう。つまりここでいふ天武一五年造立説は、銘記の内容とそれを補完し得る『書紀』の記述に依拠するものであつて、道明がいかなる寺に所属した僧かについては不明といふほかない。

『書紀』によれば、先述のやうに天武一五年七月二〇日に「朱鳥」と建元されたが、天皇の和風諡号にみるやうに銘記の撰述は当然その九月九日の天皇崩御以降のこととせざるを得ない。したがつてその上句は建元前だから銘記に「朱鳥」の元号が使はれないのは当然である。しかし干支が明記されないのにはもうひとつの理由が考へられる。

すなはちここはむしろ銘辭の修辭的な制約である。問題の後聯(e)「歲次降婁・漆莧上句・道明率引・捌拾許人。」(○は平、●は仄字)はその内容が歴史的事実を述べてゐるにもかかはらず(そして次のfの散文に続くのだが)、それ以前の四言二句の聯句a・d(起・頌・頸・腹聯)に対応させて、あへて同様の四言二句の聯句で表記し、その聯句の脚字「句」、「人」は、ここも同様に「上平真韻」で押韻してゐる。

したがつてむろんここは散文的な干支などの表記はなじまず、仮に強引に「歲次丙戌」(天武一五年説)または「歲次戊戌」(文武二年説)のやうに干支の表記をすれば、そのいづれにおいても平仄の排列法「二四不同」に反してたちまち平仄の調和を損なふことにならう。それにだいいち、続く(f)の「奉為。飛鳥清御原大宮治天下天皇。敬造。」により、銘記の内容が天武天皇の治世下のことであるのが自明であり、ことさらにここで干支表記をする必要もなかつたのではないか。とすれば、逆に「戊年七月」に相当する雅語による表記だからこそ、以下の「飛鳥清御原大宮治天下天皇」が天武天皇を示唆することは明白と

いはねばなるまい(32)。

d. 銘記の書風

銘記の書風について、同様の書体をもつ小川広巳氏蔵『金剛場陀羅尼經』(丙戌年奥書)があり、それと比較してこれが欧陽詢の子、欧陽通の筆に酷似してゐるとはやくに指摘したのは内藤湖南であつた(33)。欧陽通の筆はともかく、確かに銘記と陀羅尼經とは欧陽詢—欧陽通の書風で類似してゐる。いま両者をこまかく比較する余裕はないが、例へば両者に共通の「仏説」「菩薩」「心」「敬造」などの文字ひとつをとつても、その打込みの強い入筆をはじめ、いはゆる三折の筆法においても、あるいは払ひの強い右撥ねの書体にしても、両者には共通した初唐代の欧陽詢—欧陽通風の三折法楷書の特徴は否定できない。

問題は、『金剛場陀羅尼經』が丙戌年の奥書をもち、その丙戌年が天武一五(六八六)年に相当することはほとんど異論がないにもかかわらず、これと類似する本法華説相図の銘記の「戊年」を天武一五年のものと同定しないところにある。両者の書風が共通することは、いふまでもなく書の様式が文字通り同様式であることを示す。この書法なり書風において同質性をもつことは、表現における感性的な資質において類似することであつて、時期が異なれば、あるいは範式が違へば決して共通するものではない。その意味では、これほど書風において顕著な同時代性を示す作例はほかに容易に求められないのではないか。現にこの時期の金石文の多くが初唐の三折法さへいまだ消化し得ないだらしの無いものであることをみれば、この両者にみられる本格的な欧陽詢風の書風は、中央支配階級における初唐文化の直接的な接受を

端的に示してゐるとみて差支へあるまい。しかし彼我の書にあつて、その格調、品位において天地の相異があるのは断るまでもない。

ところで、なるほど尊号や天皇号、または宮号や諡号においては、文字がもつ属性としての意味は限定され、あるいは用字や成句のもつ歴史的限界が存在してそれも尊重されねばならないが、これらは往々にして時間的深度の幅をもつて利用されることがある。その例外を目標として、ある時間的尺度を上下させるのでは、いはゆる感性的な表現における、ある種の動かしがたい資質(様式)はつひに見落されることになるのではないか。その意味で、銘記の書風においては、丙戌(六八六)年の奥書をもつ『金剛場陀羅尼經』は動かし得ない指標 *ikmal* であるとともに(34)、本法華説相図との同時代性を同定するための絶対的な証左だとも言へるであらう。

以上、銘記にみる造立時期についてを要約すれば、つぎのやうになるらう。

a. 「聖帝超金輪同逸多」が必ずしも則天武后の尊号に由来せずとも成立し得ること。

b. 転輪王と弥勒(阿逸多)との伝説は古くから経説に説かれるところで、これまた必ずしも武周革命の時期を俟つまでもないこと。

c. 「戊年」がいつかについては、銘記の「歳次降婁。漆菟上旬。」は「道明率引。捌拾許人。」との脚字押韻の聯句だから、四言二句の限られた韻文としては必ずしも十分な表記にはいたらず、また続く「飛鳥清御原大宮治天下天皇」の諡号(宮号)が示しているやうに、

これが天武治世の発願と敬造であることが自明であるから、あへてここで年号や干支を十全に表記する必要はなかつただらうこと。

d. また銘記の書風については、はやくに指摘されてゐる『金剛場陀羅尼經』(六八六年書写)との類似によつて、同時同人の筆に擬するのとはともかく、その欧陽詢—欧陽通風の書風の一致により、本法華説相図の造立時期の同定において動かしがたい表現上の指標があること。

いづれにしてもここで縷説したやうに、もし福山説の則天武后の尊号に拘泥すれば、本法華説相図の造立時期は文武二(六八九)まで降さねばならず、それに伴ふ諸条件を整へるためにはかなりの無理を余儀なくされることとなる。その結果、銘記がもつ聖帝天武天皇の「聖蹟を保つて朽ちさせまい」とする造立意図はもとより、その「千仏・多宝仏塔」を奉じて「壹しく賢劫に投じて、俱に千聖に値はん」とする道明らの造立意図は、『書紀』や『金剛場陀羅尼經』がその成立条件を補足してゐるにもかかはらず、十分に理解されないことになるのではないか。

結び

以上、長谷寺銅板法華説相図の莊嚴意匠について(上)(下)に分けて検討し、その(上)においては、構成要素を(一)宝塔、(二)千仏、(三)仁王、(四)奏樂天人の各面から点検した。これを要約すれば以下のやうにならう。

一、本法華説相図は、主題である『法華經』見宝塔品の宝塔涌出の場

景を中心に、宝塔の周囲には千仏等のそれぞれの構成要素が配されてゐるが、これらはいづれも経説に説かれる賢劫千仏思想に裏打ちされてゐる。

二、意匠の構成として、これらの構成要素は、宝塔を中心に据ゑた石窟寺院の宝塔窟にみるやうな三次元的な壁面を前提に構成された二次元空間である。またこれにより賢劫千仏↓弥勒仏をはじめ、賢劫千仏↓宝塔脇仏像群、賢劫千仏↓仁王の各壁面が、宝塔を囲んで緊密な内部空間を構成してゐる。

三、宝塔を中心に据ゑた三次元空間への観者の関りには、観者が本図において宝塔と千仏(分身)の關係を観るばかりではなく、観者みづからも宝塔をめぐる千聖のひとりとなるように配慮されてゐる。したがつて銘記に「忝しく賢劫に投じて、俱に千聖に値はん」とあるのは、単に道明らばかりでなく観者も共有できる一句として捉へられ、法華説相図はかうした「誰しもが仏になれる」といふいはゆる大乘仏教的な意図を踏まへた三次元的空間を前提に構成されてゐる。

四、本法華説相図の表現形式(様式)は、例へば宝塔の厳格な二等辺三角形に規制された構図や、勁く直線的な稜角、天蓋にみられる共通して堅さのある唐草、過大に強調されたしかし存在感のある如意珠、写実を指向してはゐるものの硬直さのある仏像や仁王の肉付けなど、総じてその表現には簡古で勁直さが認められる。かうしたいまだ写実性の十分でない表現は、少なくとも持統八(六九四)年に比定できる伊賀夏見廃寺の大型博仏の様式とは一線を画し、それより溯ることとはあつても降して位置づけることは無理であらう。

また本論(下)においては、(一)銘記の構成、(二)造立意図、(三)造立時期の各項にわたつて検討したが、これも要約すれば以下のやうにならう。

五、銘記は、銘序が主として四六駢儷体により、また銘辞部分が四言二句、5聯の律詩体風に構成されてゐる。

六、銘記にみる造立意図は、天武天皇の奉為に『法華經』見宝塔品にもとづき「千仏・多宝仏塔」を敬造し、古来から転輪聖王が弥勒仏に擬せられる経説上の伝説にちなんで、いはゆる「当今如来思想」の反映として聖帝天武天皇の聖蹟を永遠に明記して鑽仰しようとするものである。と同時にその好機にのぞんで道明らの練行衆徒は、多宝仏塔涌出に集会する賢劫千仏にあやかつて千聖の値遇にあづからうとするものであつた。

七、うち、銘序部分④における弥勒仏に擬せられる聖帝の「超金輪同逸多」の表記は、ほかの経説の転輪聖王と弥勒の伝説によつても十分に成立し得る六言句だから、必ずしも則天武后の尊号を俟つまでもない。

八、銘記はその造立年次を「歳次降婁。漆菟上旬。」(戊年七月上旬)とのみ記すため、これがいづれの戊年か諸説があるが、ここは前四聯句(律詩体)に併せて「歳次降婁。漆菟上旬。」「道明率引。捌拾許人。」とする脚字押韻(上平真韻)の聯句であり、しかもただちに次の「奉為。飛鳥清御原大宮治天下天皇。敬造。」に続き、その敬造が天武天皇(諡号)の奉為であることが明示されてゐるから、この戊年が天武天皇の崩御の「丙戌年」であるのは自明である。した

がつてことさらに年号や干支を記す必要はなかつたと解される。

九、銘記の書風は、現存最古の天武一五(六八六)年書写の『金剛場陀羅尼經』のそれと類似し、ともに欧陽詢—欧陽通風の書風を示してゐる。このやうに両者が相互の書風において類似することは、時期が異なつては有りえない様式上の同時代性を示してゐる。したがつて『金剛場陀羅尼經』の「丙戌」(六八六)年は、銘記の「戊午」を同定するための掛替へのない指標として補完できる。

以上により、本法華説相図の莊嚴意匠は、銘記にいふ造立意図、すなはち聖帝天武天皇の聖蹟が永遠に保たれることを明記するため、またその絶好の機会に道明らの練行僧が賢劫千仏にあやからうとする願意にもとづいて、『法華經』見宝塔品の宝塔涌出と賢劫千仏の來集を主題として表現されてゐることが明らかとなつた。

しかしそこには単に見宝塔品の宝塔涌出の劇的場景に限らず、釈迦・多宝仏の分身である賢劫千仏をはじめ、その一斑としての弥勒仏、または宝塔脇仏像群(東方薬師仏・西方阿弥陀仏に相当)、さらに仁王(金剛力士)において、いづれも賢劫千仏との關係で捉へられてゐるのが確かめらる。そのことは、本法華説相図の莊嚴意匠や構図、あるいはその空間構成の造形的な面においても明らかで、本図が単なる二次元的平面図ではなく、宝塔を中心の三次元的な壁面構成を前提に構想され、さらには主題の宝塔と千仏、千仏と諸像の關係においても緊密に、かつ効果的に表現されてゐる。

一方、銘記はこれらの表現に即応して二つの願意が述べられ、一つ

は聖帝天武天皇の聖蹟が永遠であることの明記と、二つめは道明らの練行僧が賢劫千仏に値遇しようとするものである。このやうな二つの願意は、聖帝(弥勒)も道明らとともに賢劫千仏の一斑として位置づけられてゐることにほかならない。本図の賢劫千仏を基調にした壁面構成は、さうした意図を端的に示してゐるものと解される。つまり本法華説相図は、意匠面においても銘記の上でも、『法華經』見宝塔品の宝塔涌出を主題にするとともに、もうひとつこれの裏打ちとして釈迦・多宝仏の分身による賢劫千仏思想が基調としてあり、これをぬきにしては本図の莊嚴意匠と造立意図は考へられないだらう。

しかし先述のやうに銘記は多分に修辭的であり、あるいは駢体文の莊重な調子とともに真実味に欠けた形式的で華奢な一面がある。したがつて天皇陛下の奉為とする願意も、道明らの造立意図の正当化ないしは權威づけの側面さへ窺へるものも否定できない。しかしそれはともかく、かうした修辭的な文飾等を除けば、道明らの本来の目的は、実は『法華經』見宝塔品にもとづく「千仏多宝仏塔」の造立にこそ置かれ、むしろ彼らはこれによつて逆に「賢劫千仏と弥勒(聖帝)」の当今如来思想をはじめ、「賢劫千仏と道明ら(練行者)」、さらに「賢劫千仏と觀者(信仰者)」の参加をも包括できる莊嚴意匠をいかに design するかにあつたらう。それはまた『法華經』が説く法(眞実)の継続性ないしは永遠性をいかに表出するかもあつた。その意味では、宝塔を中心とした宝塔窟の壁面構成の莊嚴意匠は、単に見宝塔品で説く賢劫千仏の宝塔への來集の表現にとどまらず、銘記でいふ道明ら、ないしは觀者の賢劫千仏への参加を顯示するために工夫されたすぐれた装置

であつたと言へるのではないか。

このやうに本法華説相図の意匠と銘記の造立意図をみると、聖帝をだれとみるか、ひいてはその時期をいつにおくかはおのづと限定される。すなはち聖帝はきはめて重大な契機を担ふ特定の、いはゆる転輪聖王でなければならず、またその時期は限定された重要な条件を帯びた時点でなければならぬ。それはつまりところ造立時期の同定をいつにするかに帰着する。その際、上述のやうな条件を満足できるものとしては、聖帝は天武天皇、造立時期の戊年七月とは天武一五年、すなはち朱鳥元年(六八六)のそれ以外には該当するものはあるまい。

〔注〕(頁数下のabcは上、中、下段を示す。)

(1) 『甚希有経』(唐玄奘訳 一卷 『大正藏経』一六一七八二a

↳ b、貞観二三〔六四九〕年)

(2) 『広弘明集』(唐道宣撰 三〇巻 『大正藏経』五二一九七↳

三六一 麟徳末〔六六四〕年)

『瑞石像銘』(『広弘明集』所収、『大正藏経』五二一二一一

c ↳ 二a、斉永明七〔四八九〕年)

『光宅寺刹下銘』(『広弘明集』所収、『大正藏経』五二一二

一一c、梁天監六〔五〇七〕年)

(3) 銘辞は一種の律語体に整へられて、第一聯(起聯a)の第1、2句の脚「仙」、「縁」は下平先韻で同じ押韻であるが、次の第二聯(頷聯b)の第4句の脚「泉」(下平先韻)以外は、第三聯(頷聯c)第6句の脚「定」(去声徑韻)、第四聯(腹聯d)の第8句の脚「聖」

(去声敬韻)において、いづれも同じ仄音の去声であり押韻が異なる。ただしこれら4聯に続く第五聯(後聯e)の第9、10句の脚韻はともに上平真韻である。また第一聯と第五聯のほかは、すべて四言二句をつらねた対句で構成されるが、平仄の排列法や反法はそれほど厳密ではない。

正格の律詩における押韻は、七言律詩の場合、第1、2、4、6、8句の脚に押韻し、また音律語調を重視するために上・去・入声の仄音で押韻することはなく、平韻にしても有尾音(End tone)が多用されるのが通例だが、本銘辞の場合、第1、2、4、9、10句の平韻の押韻を除けば変則的だから、むしろ律詩を引きのばした排律詩(長詩)の詩型をとつてゐるのだらうか。

(4) この冒頭の解釈は諸家の見解がさまざまで一定しない。いづれにしても欠字の多い不完全なものに拘泥しても始まらないが、その点で、銘文の全体の性質から考へて、初めの部分は概念的な序論でなければ均衡がとれず、造られた千仏多宝塔は③に至つて初めて出て、結論をなす銘辞の終りにさらに繰返されるとみた方が適當であるとし、さらに(この部分は)「一般的な記述であつて、歴史的事実が問題となる場合にはほとんど全くの装飾文であるに過ぎない」とする福山説が妥当なところであらう。

なほ、下記の福山論文は宝亀元(七七〇)年説を提唱した当初の福山説だが、ここにはそれまでの諸家の説を簡潔に紹介し批判してゐるほか、銘記の原文も更訂され釈文が掲げてある。拙論は、句点、改行を施した以外は主としてこれに負つてゐる。

福山敏男「長谷寺の千仏多宝仏塔銅板」(『日本建築史研究続編』所収 七六頁追記 墨水書房 一九七一、初出論文名「長谷寺の金銅板千仏多宝仏塔について」『考古学雑誌』二五―三、四、一九三五)

- (5) この原文は「恒秘瑞巖」だが、これを後世には「銅板を安置した石室」と解する縁起譚を生むきっかけとなつた(前掲注4、福山論文七三頁参看)。それは現在の五重塔のある西岡、かつての三重塔(明治九年焼失)下に石室があり、その石室に本法華説相図が秘蔵されてゐたとする伝説を生み、それが「元長谷」なる長谷寺濫觴の縁起譚となつた(「菩薩前障子文」)。

しかしここは次の「金石相堅」に係る銘記の常套的な表現で、例へば「敢勒貞金」(葉師寺擦銘)とか、「刊鏤金芳願言不朽」(劉碑造像銘、「金石萃編」卷三三)のやうに、要するに堅固で不朽な金石に明記することをいふための単なる形容に過ぎないとも解される。また直接的には「星漢洞照」が「下洞」湧泉「仰迫星漢」(光宅寺刹下銘、前掲注2)によつてゐるのと同様に、続く刹下銘の「方當銷巨石於賢劫」に誘発されたものであらうか。

- (6) 拙論「長谷寺銅板法華説相図の莊嚴意匠について(上)」五八頁(『研究紀要』第八号 駒沢女子大学 二〇〇一)参看。

- (7) このうち宝亀元年説(前掲注4)は、のち論者の主張が文武二(六九八)年説に変わったので消滅したと言つてよいだらう。

- (8) 福山敏男氏の文武二年説は、著者自身の前掲書所収論文(注4)の追記によれば、当初の「興福寺金堂の弥勒浄土像とその源流

(下)」においては「文武天皇を溯り得ない」としたが、角川版『世界美術全集』2(一九五二)の「銅板」の解説にいたつて文武二年の戊年に充てたといふ。ただし文武二年の福山説は両論文において注記ないしは追記のかたちで指摘してゐるだけで、その解釈の詳細については述べてゐない。

福山敏男「興福寺金堂の弥勒浄土像とその源流(下)」(『考古学雑誌』三八―一 一九五二、のち『福山敏男著作集 一・寺院建築の研究 上』所収 三二三頁注[32] 中央公論美術出版 一九八二)

- (9) 「聖帝」は転輪聖王、転輪聖帝の略である。いふまでもなく転輪聖王は統治の輪を転じる偉大な帝王を指し、インド神話において世界を統一支配する帝王の理想像とされる(『織田・仏教大辞典』「中村・仏教語大辞典」)。

- (10) 『旧唐書』卷六 本紀第六 則天武后 一一一―一五―一三四頁(中華書局出版 一九七五)

『新唐書』卷四 本紀第四 則天武后 中宗 一一八―一〇五頁(中華書局出版 一九七五)

『資治通鑑』卷第二〇四 唐紀二〇 則天順聖武后上之下 一四一―四四三―六五一頁(中華書局出版 一九五六)

矢吹慶輝「大雲經と武州革命」(『三階教之研究』第三部附篇二所収 六八六―七六〇頁 岩波書店 一九二七)

塚本善隆「則天武后の革命と大雲(經)寺」(『日本仏教交渉史研究』「国分寺と隋唐の仏教政策並びに官寺」所収 二五―三一頁

弘文堂書房 一九四四)

(11) 前掲注(10)の塚本論文二八頁參看。

(12) 塚本善隆「北魏の仏教匪」(『支那仏教史研究 北魏篇』所収 二四三―二九一頁 弘文堂書房 一九四二)

(13) 前掲注(10)の矢吹論文七〇〇頁參看。

(14) 『過去現在因果經』一(『大正藏經』三一六二一a)

(15) 『中阿含經』卷一三說本經においては、弥勒が未来の人寿八万歳の時に弥勒如来となることが説かれるとともに、「阿逸多」は弥勒と同じく仏弟子として扱はれ、弥勒と同様に人寿八万歳の時、「螺」と名づける転輪王となると説かれてゐる。弥勒と阿逸多との関係については、松本文三郎『弥勒浄土論』を參看。

『中阿含經』(『大正藏經』一一五一〇a―五一二a)

『仏説觀弥勒菩薩上生兜率天經』(『大正藏經』一四一四一八c)

松本文三郎『弥勒浄土論』一八七頁(丙午出版社 一九一一)

(16) 『法華經』從地涌出品(『大正藏經』九一四一a)

(17) 近くは、唐貞觀一九(六四五)年に印度、西域から歸つた玄奘は、入竺前から篤かつた弥勒信仰をさらにたかめて弥勒仏所に生れることを願ひ、その卒年の麟徳元(六六四)年正月には俱胝像(百千萬仏像)・賢劫千仏・弥勒仏を各一千幀あて造つて國中の塔に納めることを發願し、太宗・高宗より賜つたものはみなこの費用に充てたといふ(伝・行狀・続高僧傳)。ここにみる賢劫千仏と弥勒仏は画像(一説に一部塑像)であるが、賢劫千仏と弥勒仏とが一式であるところに、玄奘における弥勒信仰の一面と賢劫千仏思想の

實際が窺へよう。

『大唐大慈恩寺三藏法師伝』(唐慧立本・彦惊箋一〇卷 『大正藏經』卷第一〇 五〇―二七六c―七c)

『大唐故三藏玄奘法師行狀』(唐冥祥撰一卷 『大正藏經』五〇―二一九a―二二〇a)

『続高僧傳』(唐道宣撰三〇卷 『大正藏經』卷第四 五〇―四五八a)

(18) 前掲注(6)拙論(上)六八頁參看。

(19) 本法華説相図は銘記にみるやうに「千仏多宝仏塔」が正しい名称であらう。しかし例へば『国宝・重要文化財総合目録 美術工芸篇』文化庁 一九八〇)では、「銅板法華説相図(千仏多宝仏塔)」とあるやうに(正式名称はカッコ入り、本稿も便宜的にその例にならつたが)、これまで本図は主題の宝塔涌出に比重をおいて扱ふ傾向があつた。しかし本来はその賢劫千仏をも視野に入れた名称をもつて考察がなされるべきであらう。その点で早くに經説を博搜して賢劫千仏に注目した論考として下記の小野玄妙論文がある。ここでは天武一五年説をいちやく提唱するなど、本図に関する古典的な論考としていまなほ示唆するところが多い。ただし小野説の所説のうち、銘記の「多宝仏塔」とは本図のそれではなく、べつに西岡に建立された三重塔に充てて、本図はその縁起文に過ぎないとするなどは、さすがに今日でははかに首肯しがたいものがある。

小野玄妙「長谷寺藏金銅版千仏多宝仏塔像考証」(『仏教之美

術及歴史』所収 七四四―八五三頁 仏書研究会 一九一六

(20) 賢劫千仏と各像との関係が知れる所依經典としては、拙論(上)で述べたやうに、以下のものが挙げられる。

【賢劫千仏↓弥勒仏】拙論(上)五八頁b参看。

(転輪聖王) 弥勒仏国翅頭末城穰佉。

(賢劫千仏) 穰佉の子、千人中九百九十九人出家。

(弥勒) 修梵摩婆羅門家託生、出家成仏、龍華樹下三会說法。

¶『仏說弥勒大成仏經』(姚秦・鳩摩羅什訳) (『大正藏經』一四―四三四b)

【賢劫千仏↓宝塔脇仏像群(千仏一例)】拙論(上)五八頁a参看。

(転輪聖王) 転輪聖王(諸大衆のうち)

¶『法華經』序品 (『大正藏經』九―一二b)

(賢劫千仏) 釈迦・多宝仏分身

¶『法華經』見宝塔品 (『大正藏經』九―三二c)

【賢劫千仏↓仁王】拙論(上)六三頁a参看。

(転輪聖王) 勇群。

(賢劫千仏) 千人太子。

(仁王) 第二夫人二童子のうち法意。

(梵天王) 同二童子のうち法念。

¶『大宝積經』密迹金剛力士会 (西晋三藏竺法護訳 七卷、

唐菩提流志訳并合 一二〇卷) (『大正藏經』一一―四二

b―八〇c)

(21) 前掲注(6)拙論(上)五五頁、図5参看。

(22) 塚本善隆氏は、『魏書』釈老志にいふ「(前略)初法果(道人統)每言。

太祖明叡好道。即是當今如来。沙門宜應盡禮。遂常致拜。謂人曰。能鴻道者、人主也。我非拜天子。乃是禮佛耳。」を

もつて、太祖道武帝から高宗文成帝の北魏皇帝を「弘仏教の天子即ち当今の如来」ないしは「皇帝にして如来」とみるとともに、はやくに曇曜五窟の各本尊に相当させ、第一八窟本尊を文成帝かと想像したが、ほかの五窟の尊名や残る皇帝名については同定してゐない。一方、吉村怜氏は太祖道武帝を第一九窟本尊に充ててこれを弥勒仏とするほか、五窟の開鑿プランや計画変更についても述べつつ、各窟の本尊名と該当皇帝をも推定してゐる。

塚本善隆「雲岡三則 (A)曇曜の五窟と五帝に就いて」(前掲

注12「支那仏教史研究北魏篇」所収、一二九―一三三頁)

吉村 怜「曇曜五窟論 曇曜五窟造営次第」(『天人誕生図の

研究』第三部所収、四六三―九二頁 東方書店 一九九九)

(23) 『日本書紀』には、その天武一五(六八六)年七月二〇日に「元を改めて朱鳥元年と曰ふ。(割注)朱鳥、此れをば阿訶美苾利といふ。」仍りて宮を名けて飛鳥淨御原宮と曰ふ。」とある。天武天皇の飛鳥淨御原宮の始号は正式にはこの朱鳥改元時に充てられてゐる。しかしここは宮号を注記したままで、この年に正式な宮号が定まつたことをいふものではあるまい。あるいはこの宮号の記事は、元来、前文の朱鳥の訓注に続く割注であつたもので、ともども後の書入れである可能性はないのであろうか。『書紀』天武元(六七二)年には、壬申の乱のち九月に天皇は伊勢から倭京に

入り、嶋宮、岡本宮を経て、その冬にいたつて「飛鳥淨御原宮」に遷つたとあるが、このときはまだ早過ぎるとしても、天武末年まで宮号が正式に定まらなつたといふのは不自然でなからうか。

『日本書紀』卷第二九 天武紀下（『日本古典文学大系』本、四八〇頁 岩波書店 一九六五）

(24) わが国の「天皇号」の成立については古くはI欽明朝説をはじめ、II推古朝説、III大化改新時説、IV天武朝説、V持統朝説、VI大宝令時説の諸説があり、いまだ定説をみないが、現存する金石文や銘記の類からみてII推古朝説はなほ否定し難く、また淨御原令において成立してゐたかとするIV天武朝説も無視できない。したがつてV、VIを除けば、ここでいふ「天皇」は天武天皇に充てようとするのだから、いづれの説にしても時期的には矛盾しない。なほ、天皇号の成立に関する諸説について、次の森氏の論文の注(1)にその主な説と該当論文名が示されてゐる。

森 公章 「『天皇』号の成立をめぐる」 （『日本歴史』四一八号 吉川弘文館 一九八三）

(25) 山田孝雄はその著「続古京遺文」において、これを「（前略）飛鳥淨御原大宮治天下天皇は天武天皇なり。銘文を按ずるに天武天皇の奉為として敬造せるものなれば、その縁由を考へざるべからず、而其の粵以奉為天皇陛下敬造千仏多宝仏塔とあるは現在の天皇に就きて申す詞たるのみならず、（中略）その寿福を祈請するものと見えたり（云々）」と述べてゐる。

山田孝雄 「続古京遺文」（狩谷棧斎全集九『古京遺文』所収

「続古京遺文」一〇頁 日本古典全集刊行会板 一九二八）

(26) この観世音像は繡仏であつたらしく、のちの『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』（天平一九〔七四七〕年）に「繡菩薩像一帳／右以丙戌年七月、奉為淨御原宮御宇 天皇皇后并皇太子奉造請坐者。」とある。なほ、前掲注(23)の『書紀』の当該頭注が、これを「天皇皇后皇太子の奉為」とするのは、『書紀』の記述からみて「天皇の奉為に皇后皇太子が奉造」とすべき誤りである。

竹内理三編『寧樂遺文』中 三六七b―八a頁（東京堂 一九六二）

(27) 前掲注(23)『日本書紀』四七四―八〇頁参看。

(28) 本法華説相図の天武一五（六八六）年説の代表的なものに、前掲注(19)の小野玄妙説、同じく前掲注(25)の山田孝雄説がある。

(29) 『三代実録』貞観一八年五月二八日条に「先是、律師法橋上人位長朗申牒稱、大和国長谷寺、是長朗先祖川原寺修行法師位道明、宝亀年中、率其同類、奉為国家、所建立也、靈像殊驗、遐邇仰止、請每年安居、令其居住僧等、講演最勝仁王兩部經、誓願護朝廷、其布施供養、用寺家物、太政官處分、依請、」とある。

(30) 前掲注(25)「続古京遺文」には、「（前略）さて、その道明はかの長朗の申牒又縁起に見ゆる如く川原寺の僧なるべく、又銘文中に『釈天真像。降茲豊山。』といへるにて、はじめよりその地に安置せしものなること著し。又天武天皇が川原寺、即ち弘福寺に深縁を結び賜ひし事は書紀にて想像せらるゝが故に、いよいよ道明がこの像を造り奉りしも由ありて聞ゆるなり。この故にこの像

は川原寺の僧道明が、その徒八十餘人を率ゐて、天武天皇の病を祈らんが為に朱鳥元年七月上旬に作りて豊山に安置せしものたること明なり。」(句読点等は引用者)とある。

(31) 牒状の「率_二其同類_一、奉_二為國家_一、所_二建立_一也」の句は、銘記の「道明率引。捌拾許人。奉為。飛鳥清御原大宮治天下天皇。敬造。」とあるものを踏まへたものとみられる。また同じく牒状の「請毎年安居、令_二居住僧等_一、講_二演最勝仁王兩部經_一、誓_二護朝廷_一、」の句は、『書紀』の川原寺における誦經・燃灯供養・悔過・祈願等の記述を踏まへたものであらう。

なほ、福山敏男氏は前掲論文(注4)で、「長朗の牒の《修行法師位》の一句が全然根拠のない虚構であると証明されない限り、道明の活動期を天武朝ごろとする古来の説は成立し難からう」として、牒状の「宝龜年中」長谷寺建立をも重視し、当初の福山説(宝龜造立説)を主張したが、のち先述の通り則天武后の尊号の影響を指摘して忽ちに文武二年説に改めた。しかし前述のやうに牒状の内容は銘記や『書紀』を前提にした記述であり、長朗の牒状における称述は明らかに長谷寺の創建を正当化する為にでたものであらう。のちに成立の「長谷寺縁起」「諸寺縁起集」の類も大方これに影響されてゐるので、いづれも道明を川原寺僧とすることでは大差がない。

(32) ここでは主として文武二(六九八)年の福山説を排することに重点が置かれたが、ほかに十二支年づつ後らせる和銅三(七一〇)年説、養老六(七二二)年説がある。そのいづれにおいても銘記にあ

る「飛鳥清御原大宮治天下天皇」を、これを称し得る過去の天武天皇ないしは持統天皇に充てて解する点では共通してゐる。

しかしここで注意すべきは中国における銘記の本来の性格である。『文心雕龍』の例へば銘箴第十一には、「《銘》とは《名》である」として、臧武仲をひいて「天子には美德を記し、諸侯には功業を評価し、大夫には手がらを称へる」と述べ、「銘はまた称賛の働きを兼ねるから、その文体には余裕と潤いが大切である。内容は必ず精密にして明晰であり、表現は必ず簡潔でしかも深みのあることが要諦である」とする(「故銘者名(銘)」。蓋臧武仲之論銘也曰、天子令德、諸侯計功、大夫称伐。銘兼褒讚。故體貴弘潤。其取事也必覈以辨、其摛文也必簡而深。此其大要也。」。また同じく誄碑第十二には、「いつたい石碑は銘を刻みつける物であり、銘は碑に施される文飾であるが、石なる物に彫られて声名を確立する碑は、死後に書かれる誄より以前の態を述べる。だから石に刻まれて功業を称へる作品は、銘の領域に属し、建てられた碑の上に亡き人のことを述べた作品は、誄の分野に入るわけである」と述べてゐる(「夫碑実銘器、銘实碑文。因器立名、事先於誄。是以勒石讚勲者、入銘之域、樹碑述亡者、同誄之区焉。」。

つまり碑に刻まれた生前に功業を称へたものは銘のうちだが、死後に亡き人のことを述べた碑は誄であるといふ。とすれば、本法華説相図の銘記は明らかに天武天皇の奉為に発願し敬造したことを云ふ、文字通り生前の「令德」「功業」を称へた「銘」であ

つて、その内容からして、もとより過去の天皇の奉為の「誅」ではあり得ず、ましてや崩御後のいかなる「戊年七月」にも充てらるべき性質のものではないだらう。

興膳宏訳『文心雕龍』二六五―六頁（世界古典文学全集25『陶淵明 文心雕龍』所収 筑摩書房 一九六八）

は、首尾および紙背に「法隆寺一切經」の黒印があり、奥書に「歲次丙戌年五月。川内国志貴評内知識。為三七世父母及一切衆生。敬造金剛場陀羅尼經一部」。藉此善因「往三生淨土」終成正覺。

八南場廻羅屋經卷一

歲次丙戌年五月朔內國志青萍內和識為十世父母及
一切衆生敬造金剛場陀羅尼經一部藉此吉因往生淨
土終成正覺

教化僧寶林

2. 金剛場陀羅尼經(卷末・部分)小川広巳氏蔵

教化僧宝林」と記される。丙戌年は本法華説相図の銘記と同じく天武一五（六八六）年に相当し、川内国志貴評は河内国志貴郡の古称で、七世紀後半、大宝律令以前の郡の字に評を用ゐた一例である。またここに「知識」「教化僧」の用語がみられ、当代における仏教教化の様相が窺へる。僧宝林については不詳。わが国における現存最古の書写経であるばかりか、その欧陽通（？—六九二）風の書体が本法華説相図の銘記の書風と共通してゐる。ために内藤湖南ははやくに共に欧陽詢の子、欧陽通の書に酷似した作例と指摘してゐる。欧陽通の作例には、龍朔三（六六三）年の「多宝寺道因法師碑文」や調露元（六七九）年の「泉男生墓誌」があり、かうした欧陽詢—欧陽通の書風との書法、書史的な比較や位置づけは、例へば石川九楊氏の近著に詳しい。

伏見冲敬解説『唐 欧陽通 道因法師碑』(書跡名品叢刊65)

『唐 歐陽通 道因法師碑・泉男生墓誌銘』（中国法書選37 一二）

『唐 欧陽通 道因法師碑・泉男生墓誌銘』(中国法書ガイド 37)

石川九楊「大陸と連動する書『金剛地陀羅尼經』」(『日本書史』第5章 名古屋大学出版会 二〇〇一)

(34) この現存最古の『金剛場陀羅尼經』(隋闍那崛多訳)の書写に關

連して、この經の将来がいつかが問題となる。この經はすでに隋仁壽二(六〇三)年彦琮編の『衆經目錄』に所収されてゐる。ところが孝徳天皇白雉二(六五二)年一二月に味經宮において僧尼二一〇〇余を請じて行はれた読經は、その僧尼の人数からみてこの仁壽の『衆經目錄』の所収經、二一〇九部に即応するものと解され、同目錄によつた可能性が指摘されてゐる(石田茂作説)。とすると、『金剛場陀羅尼經』はすでに七世紀中葉には伝来してゐたことにならう。いま、七世紀後半の記録等に現れた主な經名を同じく仁壽の『衆經目錄』で照合してみると、およそ以下のやうになる。

〔經名〕

〔依拠〕

〔衆經目錄頁〕

安宅・土測經(後漢)

白雉二(六五二)〔紀〕

一七四 a

孟蘭盆經(法護)

齊明三(六五七)〔紀〕

一六〇 a

仁王般若波羅蜜多經

(羅什)

齊明六(六六〇)〔紀〕

一五二 c

天武五(六七七)〔紀〕

〃

持統七(六九三)〔紀〕

〃

金光明經(曇無讖)

天武五(六七七)

〔法隆・大安寺資財帳〕

一五一 a

金剛般若波羅蜜多經

(羅什)

天武一一(六八三)

〔法隆寺資財帳〕

一五八 b

藥師經

天武一五(六八六)〔紀〕

一五三 a

金剛場陀羅尼經(闍那)

天武一五(六八六)〔與書〕

一五七 a

觀世音經

朱鳥元(六八六)〔紀〕

一六二 c

甚希有經(玄奘)

朱鳥元(六八六)〔銘〕

* 一八四 c

大般若經(玄奘)

大宝三(七〇三)〔統紀〕 * 一六一 c

これによつて七世紀後半には仁壽の『衆經目錄』に収録する旧訳の一切經のほとんどが将来または書写されてゐたことが推測できる。ただし右の*印を付した『甚希有經』一卷(本法華説相図の銘記に引用の經典)はなく、玄奘訳『大般若經』六百卷とともに唐龍朔三(麟徳二(六六二)一六六五)年 靜泰編の『衆經目錄』(この目錄は仁壽の目錄に玄奘等の新訳經典を追加増補したもの)に於いて初めて収録されてゐるから、それ以降の将来であらう。その後の将来經典としては、白雉四(六五三)に入唐し天智元(六六二)年に帰国の僧道昭によつて将来の新訳經典類があるが、さすがに玄奘膝下で学んだ道昭の将来經典だけに錯誤の少ない楷好なものであつたから(『統紀』卒伝)、のちの天平写經の最善の手本となつた。また天武二(六七三)年三月に川原寺において書写された一切經は、おそらく麟徳元(六六四)年道宣撰の『大唐内典録』に拠つたものとされる(石田説)。したがつて七世紀後半における将来經の実際は、隋・唐の『衆經目錄』や『大唐内典録』にみるやうな、想像以上に豊富なものであつたらしい。なほ、本法華説相図の銘記に引用の『瑞石像銘』(蕭齊永明七[四八九]年)、『光宅寺刹下銘』(蕭梁天監六[五〇七])は、いづれも麟徳二(六六五)年の道宣撰『広弘明集』に収載されてゐるものである(前掲注1)。

かうした經典類の将来時期と将来者は具体的には特定できないが、道昭の帰国に続く天智三、四(六六四、五)年の唐使節の来

朝や、同六（六六七）年の遣唐使の帰国、さらに近くは道昭とともに入唐し天武八（六七九）年に帰国した僧道光などによつて将来されたことが考へられよう。いづれにしろ、たまたま現存最古の『金剛場陀羅尼經』から窺へる、その初唐直摸の歴史的指標としての価値ははかりしれないものがあらう。

石田茂作「奈良朝以前の伝来経典」（『写経より見たる奈良朝仏教の研究』所収 二一―三二頁 東洋文庫 一九三〇）

〔挿図出處〕

小川光三（飛鳥園藏原板）

1.